

# 新知見の南北朝時代在銘像

猪 川 和 子

## 一 序

南北朝時代すなわち十四世紀後半、正慶・元弘から、元中・明德（一三三二—一三九二）頃までの約六十年間に造られている彫刻の作例はかなり多い。最近、この年代及び室町時代の彫刻をまとめ、在銘像の集大成が行われたが、<sup>註1</sup>その後もなお新しい研究資料が見出されている。鎌倉時代末から南北朝時代にかけての彫刻と、室町時代の彫刻との様式的な違いの検討は、なお多くの作例の集大成をまたねばならないが、南北朝時代に属する作例はかなりの数に達し、全国的に分布しており、その作風は、鎌倉彫刻の延長としての特徴を具え、且つ室町時代彫刻への過渡的な作風を示すと考えられる例が多い。すなわち、南北朝時代の彫刻には、なお崩れやらめ様式的整美を保った一群の像が、室町時代の作風とはやや異ったものとして捉えられる点が見出されるので、とくに南北朝時代の美術の研究の一環として、この時代の彫刻の作例の調査を行い、かつ従来知られていなかった作者、作例の数点が見出されたので、紹介しつつ、この時代の彫刻の一端を、明確に把握するよう試みた。

新知見の南北朝時代在銘像

西園寺仏師と称された、時の権力者との結びつきを窺わせる呼称をもつ性慶の新しく見出された作例、あるいは発願主が同一であることが新にわかった作例等、新知見の諸像を中心に、雑考を試み、なお輩出するであろうこの時代の諸作例の集大成と様式整理に資したいと思う。

## 二 性慶作の諸像

南北朝時代在銘像の一つ、滋賀志那神社の普賢菩薩坐像の作者は性慶であることが、その像底の朱書銘に記されている。性慶の名は正和頃の仏師として仏師系図にもあげられており、従来この普賢像一軀だけが作例として知られていた。ところが、昭和四十五年、川勝政太郎氏が南三河の文化財調査の際に、愛知県西尾市願成寺に性慶作の墨書銘のある像を発見され、史迹と美術昭和四十六年一月号に発表された。年代的には志那神社像から十二年ほど後の作であるが、両像の作者性慶が同一人であるかどうか、願成寺像を調査した結果、略々疑いもない同一作者の作風をもつことがわかり、南北朝時代の仏師の行動範囲の一端を知ることが出来た。それに加えて、願成寺の本寺である愛知西尾市実相寺の如意

挿図1 普賢菩薩像  
滋賀 志那神社蔵

挿図2 同 側面

挿図3 同 背面

挿図4 釈迦如来像  
愛知 願成寺蔵

挿図5 同右 側面

挿図6 同右 背面

挿図7 如意輪観音像  
愛知 実相寺蔵

挿図8 同右 側面

挿図9 同右 背面

輪観音坐像の造型、様式が志那神社、願成寺、両像によく共通するところがあり、無銘とはいえ、ほとんど性慶の作例として疑えない像であるので、併せてこの三像を比較し、仏師性慶の作風の検討を試みた。

滋賀県草津市志那町志那神社の普賢菩薩坐像は、

法印性慶造

(ママ)花押

建武元  
戊戌十二月日

挿図10 志那神社普賢像銘

の銘が、像底底板上に布をはり漆をかけたその上に、細い針書状に朱書されている。像高四五センチ、寄木造、玉眼、

挿図11 願成寺釈迦像銘

彩色のある合掌形の像で、頭部は毛筋を細かに彫出、宝冠帯

に毛束が垂れる形につくり、耳にも髪がかかり、下方はひも耳である。

顔は褐色がかった黄色にすすけているが、胸のくぼみ、耳の中に白い肌色の彩色がのこり、身色を示している。裳の膝はオレンジ色が腿色した黄褐色地に七宝文様の切金文をおき、その上に更に切金の二重円で囲んだ黒色の花文を画く。腰裳は緑青地に彩色文、上方に襷格子の切金文がある。条帛は赤地に三重格子の中に田形をはめこんだ切金文等、彩色と、繊細さを残した切金文が調和を得て配される。卵形の輪廓の顔形、細い目と、小さな唇の、おだやかな人形のような優しい表情、これは性慶の作品の主要な特色である。両腕の内側に肩帛が波をうってわだかまる形式や、結跏の足から膝への裳の線等、なお自然な衣文の動きをとらえて、かなり巧みに表現する。形態のバランスも均衡を保ち、破調がない。これが長所とも、また迫力を欠く点ともなっている。銘は像底の黒褐色をおびたそのほぼ中央部に記され、年の干支も誤り、後の追銘と考えられているが、根拠あるものとして採用されていたものである。

愛知県西尾市巨海町西脇五八願成寺の釈迦如来坐像は、同じく寄木造、玉眼、やや像高は小さく、四一・五センチ、髪際高三一・〇センチ、膝張二九・〇センチ、首は柄さし、頭部は耳後で前後に矧ぎ、体軀も前後はぎ、両肩は別材とする通例の寄木造で、

(膝前部墨書)

(胎内背面)

貞和二年 丙戌六月一日作始了

比丘僧淋寛為

大仏師性慶法印

(胎内背面下方より脇にかけ)

明治十二年

卯五月作置也

一色天神町仏師弥一郎

直之

とあり、背中うなじの辺りに花押がある。

彩色はかなり汚れ黒ずむが、のこっている。宝髻、両手首より先、右袖口の一部は後補である。冠帯の飾りの穴に髪の一束を通す彫出、ひも耳の上に髪束がかかる形式は、志那神社と全く似た形式である。衣や裳の彩色の上に盛上彩色文様を置く。左肩や腹前に鳳凰文、胸前部には角形の渦卷文、肩にかかる衲衣は界線内に宝相華唐草文、衿の辺の縁とりの文様に蔓唐草様の盛上彩色を置いている。盛上彩色はいずれも細緻に緊密に画かれている。

この釈迦如来像も卵なりの顔形に細い目と小さな愛らしい唇、顔容すべてよく共通し、眉のカーブ、目のきり方、鼻や唇の形、僅かにくれ二重になっている顎などが共通し、太目に丸味をおびた衣の皺をたたむ

衣文線の処理も同趣である。建武元年から貞和二年（一三三四—一三四六）までの十年余の年月の隔りは、むしろこの両像の場合は大きくない。

願成寺には開山可庵円慧和尚の像と、その行跡を記した塔銘がある。

応永二十三年、前南禅寺住持であった東漸健易が書いたものである。可庵は、東福寺聖一国師の弟子応通禅師の弟子であり、願成寺第一世は応通禅師とし、自らは第二世と称した。康永二年（一三四三）入寂し、釈迦像はその三年後の造立ということになる。

同じ西尾市上町実相寺は、文永八年（一二八二）西城城主吉良良満の創建にかかり、聖一国師の弟子応通禅師を招請し開山とし、東福寺派の寺となった。のち、足利尊氏が五重塔を建て、法華經を納め、この寺を三河の安国寺に定めたという格式を持っている。この寺の本堂に安置される如意輪観音坐像は、無銘ではあるが前の二像と非常に近い形式を示しており、おそらくは同一作者の作と考えられる。

坐像としては珍しい二臂の如意輪観音像で、右手は軽く頬づえをつく形、左手は垂下し、指は地付に置く。右膝を立て、足を、左足裏と自然に重ねた形につくられ、写實的にまとめ、かなり巧みな造形を示している。卵形の顔、切れ長の目、唇の形も前の二像と同様である。顔色はにぶい金色の紛溜状を呈しているが、これは後補が加わっており、一部剥落している。唇の鮮やかな朱彩も同様と思われる。冠帯の花飾など志那神社の普賢像に近い。衣は彩色の上に細緻な盛上彩色を置くが、これは願成寺の釈迦像と同巧である。右外袖に七宝切金文地に盛上彩色、背部に格子に角渦卷文を配した切金に円花や雲形花文の盛上彩色、右足裾には菊花文、その他衣の縁飾りに蔓唐草文の盛上彩色を施している。切金

文を多く用いる点は志那神社像と同じである。

寄木造の形式は願成寺釈迦像と略々同じで、頭部は耳後に短ぎ目があり、首柄さしこみとし、宝髻は後補の別材である。この像の背面にはやや右よりに短ぎ目があり、背面は左右短ぎと思われる。立てた右足も、途中で上下に分れ、短ぎを行っている。両手とも手首より先は後補、左手地付裏には「実相」の文字がある。像高五四・七、髪際高四一・〇センチ、三像の中では最も大きく、姿態も複雑である。底部はこの時代の作例にも多く見られる形式で底板をあてて、布を張り、漆をかけるが、文字は見出されない。

願成寺の本寺にあたる実相寺に安置されるこの如意輪観音像も、写實的にまとまった衣文の彫出を見せる整った背面の造型、側面観の顔の形相、衣文のしわのやや丸味をもった線、皴の集り方、布端のわだかまる形式など、両像はまさに同作者の作と考えられる。おそらく同一の彩色絵師によって仕上げられたと思われるその盛上彩色、切金文など、両像があまり時を隔てぬ時期の作ではないかと想像される。

志那神社、願成寺の両像に記される作者、性慶は、南北朝時代の作家の系譜のどこに位置する人であろうか。「室町時代仏像彫刻」の仏師の系譜の中では、三条仏師の系統の中、兼慶の系列下に配している。そして、作風については慶派<sup>註3</sup>に近いとする。

墨水遺稿卷之三、歴代大仏師譜では、三条仏師の系列の中に、法印朝円、法眼性慶、法眼良雲をあげ、出典を次のように記す。

実衡記云、正和四年二月二十四日、道々輩交名。中略 木仏師、三条法印朝円、法眼性慶、法眼良雲



この実衡記とは、西園寺公衡の息、実衡の記した、正和四年の「春日社頭和歌諸事」の記載と思われ、正和二年二月十二日に神興飯屋上棟のことがあり、行事取始が廿四日、その行事の次第に続いて、「道々輩交名<sup>註4</sup>」として、関係のある諸職の名を連ねる。その次第によれば「大宮」関係の木仏師として三条法印朝円とともに法眼性慶の名をあげ、「二宮」「聖皇子」に法眼性慶、「客人」「十禅師」「三宮」関係の木仏師として法眼良雲が記されている。

このように日吉神興と関係があると思われる諸職の一人として名を連ねる法眼性慶と、約二十年後に志那神社像、三十二年後に願成寺像作者として記される法印性慶とは、同一仏師と考えてとくに不都合はないであろう。実衡記「春日社頭和歌諸事」の記載によれば、はるばる京都から下向した一門の人々によって、南都西南院において如何にも都鄙りの蹴鞠の遊びが行われたことも記されている。あたかも職人尽しを見るような人々の交名、その中に三条法印朝円につづく法眼位の二人の仏師名は、やはり三条仏師系の人々を考えることが自然ではなからうか。

墨水遺稿卷之三附録に、「仏師伝」が掲げられており、墨水遺稿の著者黒川真頼はこの仏師伝はさほど充分なものではないが、参考に掲げると断っているが、その中に、

康円、康秀、康清、康永、信慶、宗慶につづいて性慶<sup>西園寺大仏師</sup>、湛雅、湛康、康誉、康尊、康祐、慶秀をあげ、「以上湛慶の子孫又弟子」と記し、「性慶は其系伝を知らず、正和頃の仏工なり、」と注する。ここでは慶派の仏師としてあげるが、そこに註される「西園寺仏師」とは、その拠り処は西園寺実衡記にあることを窺わせ、さらに正和頃の仏工なりという

のは、正和四年の前述の記録にもとづいていることを明らかにしている。すなわち、性慶を慶派の仏師として扱う根拠は慶の文字をもつその名前によるものであるうか。「其の系伝を知らず」とすることは、ここでは慶派であることの根拠を弱める。

南北両朝に勢力を有していた西園寺家に関係あり、三条仏師朝円に従う仏師ということは、改めてその系列の仏師を考える方が妥当と思われる。三河の安国禅寺である実相寺が、足利尊氏によって尊信され、東福寺末となっていた事実は、東福寺に当時用いられた仏師に院派の仏師が知られることなどからも、京都の仏師により強い親近性があつたのではないかと想像させる。

端麗さが主調である志那神社の像から、三河の両寺の像への推移は、さほど大きな飛躍はなく、すでに完成した作風の同一パターンとも云うことが出来、伝統的手法に加えて、衣文線や、髪処理などに宋風を含めた慶派の影響を受けていることがその像容の上に認められるが、その表情等はなお慶派の像とはやや異質のものが窺える。

### 三 秀弁作の像について

滋賀県甲賀郡甲賀町櫟野寺の弥勒仏坐像は、その膝前裏墨書に、

敬白 奉造立河合寺弥勒仏像一軀 歴応參年<sup>庚辰</sup>八月廿七日

大仏師法橋秀弁 僧長弁

大願主阿闍梨 宗舜 并結縁等

と、この像が櫟野寺元来の像ではなく、河合寺の像であることが記され、作者大仏師秀弁は、京都観音寺の十一面観音坐像の作者と同一人で

挿図12 弥勒菩薩坐像

滋賀 櫛野寺蔵

あることも従来知られている。この弥勒仏像は像高八八センチ、内割のないブロック式の寄木造、従って目は彫眼である。眼眉、髭は墨で、口は朱彩、頭髮にも彩色をのこす外は素地の像である。

宇野茂樹氏「近江造像銘」によれば、河合寺とは、もと同町鳥居野大鳥神社の神宮寺河合寺であるとされる。近江国興地志略卷之五十三、甲賀郡第四大原莊の項によれば、大原莊は源平盛衰記に「法勝寺領大原莊」として、古く法勝寺領であったことが記され、附近を大原九村、また十八村を数え、その中の「鳥居野村」に牛頭天王社あり、大原莊九村の産土神であり、これは古昔伊賀国川合村から勧請、大原山河合寺はその社

挿図13 同上膝裏銘

僧であつて、寺院は五、皆比叡山延暦寺末であると記されている。弥勒仏はこの河合寺の本地仏であつたという。

この弥勒仏像と同一作者の像とされる京都府乙訓郡長岡町神足 観音寺の十一面観音坐像<sup>註5</sup>には次のような墨書がある。

(胎内胸部)

当代覇者將軍源尊治

住持比丘寿山昌永

大願主比丘寂悟

常光寺観音像

旦那願主光信

大仏師肥後法眼秀弁

文和二年<sup>末</sup>六月二日安座之

この常光寺がどこの寺か従来明らかでなかったが、たまたま嘗て調査した旧常光寺蔵の二天像一軀の胎内墨書銘に<sup>註6</sup>

(胎内腹部)

(底部)

(胎内背面)

仏師三条民部法橋同三位

常光寺二天

甲賀

旦那光信 上大原村

願主□信

応安六年六月一日

奉造常光寺二天

願主寿山第四代長老

仏師三条民部法橋同三位法橋

三条民 応安六年<sup>末</sup>六月一日

部法橋 願主寂悟

三位法橋 旦那光信

挿図16 同 背面

挿図15 同 側面

挿図14 十一面観音像 京都 観音寺蔵

があり、この二天像は滋賀県から出たという伝来と共に、

この胎内銘はそれを十分に証明するものであった。奇しくも観音寺十一面観音像と願主及び旦那の名を同じくするこの銘の常光寺とは、近江国、甲賀、上大原村と記される文字によ

って、大原荘に所在する常光寺であることが推定出来るであろう。近江国輿地志略、甲賀郡上田村の項には常光寺の名を見出すことが出来る。

○常光寺

上田村に在、大慶山常光禪寺と号す。建武年中の開基、本尊十一面観音恵心の作、云々

とあり、この常光寺は実在する。現在の本尊十一面観音像は平安時代の作であり、寺の宗旨は、浄土、天台、禅宗と変遷している。

櫟野寺は、同書甲賀郡第五の項に、油日谷七村の中にあつて、大原十八村内に関係深い像であることが知られるわけである。願主寂悟、旦那光信、住持比丘寿山昌永、願主寿山第四代長老等については、明らかにし得ないが、同じ甲賀郡の河合寺と常光寺の両寺において、二軀の像

は、暦応三年（一三四〇）から文和四年（一二三五）の間十五年をへだてて同じ作者によって作られたと思われる。その両像のうち、弥勒仏像は奈良興福寺の吉祥天と同様の内刳のない左右矧を主とする寄木造で、十一面観音像の寄木は内刳の大きい寄木造となっており、構造的に違いはあるが、その造型には近いものがある。

挿図17 同上 胎内銘

京都観音寺十一面観音坐像は、像高八四センチ、玉眼、寄木造、頭体とも前後矧ぎとし、頭部柄さし、両肩を別材、膝前を別材とする。銘は胸部に墨書されている。地付部に布をはり、膝前の一部は木地があらわ

れている。後頭部の化仏一つを欠く。彩色像で、衣に盛上彩色を施す。黄褐色をおびた衣の上に切金文と盛上彩色があり、腹部前に麻葉、肩布の辺に卍くずしの切金文をおく。衣の縁とりは唐草文を盛上げる。やや伏目の目のきり方、鼻、唇の形、衣文形式など、櫛野寺像によく共通し、同一作者であると認められる。

前記した二天像は、十一面観音像の文和四年（一二五五）から十八年後の応安六年（一二七三）に造られ、作者は三条民部法橋と、三位法橋と

挿図18 二天像 旧常光寺蔵

神奈川宝戒寺蔵

挿図19 地藏菩薩像

記されている。この頃民部と称した仏師に舜慶があるが、舜慶は奈良椿井仏師との関係ある仏師と考えられており、京都三条仏師の系統とは異ると思われる、その作風もかなり異なる。この二天像は院派の仏師院尋作の正長二年（一四二九）の西明寺二天像に近く、体軀の均衡、表情等に端正さはもはや見出されず秀弁の作品とはかなり違う。三条民部法橋、三位法橋は、京都仏師であったと考えることが出来るが、しかしこの作ゆきに至っては、院派とも、慶派とも判別し難いものとなっている。しかし、その銘にある近江国甲賀、大原荘とゆかりのある願主、同じ寺の像として作られたということは、秀弁の属していた仏所の系統の仏師にこの二天像を作らせたと考えるのは極めて自然であろう。また一つ興味ある点は、櫛野寺像と観音寺像に個性的に表現される衣文の処理の形式が、この二天像の腹部にも僅かにその残影を見出すことが出来る所である。しかも、その彫り方が、もっと顕著に見出されるのが、神奈川宝戒寺の三条仏師憲円作の地藏菩薩坐像である。この像の腹前に截られた衣文線の特徴は、前記三像と共通し、さらに後述する少納言法眼豪円作の薬師如来立像の腹部にもそれが見られるのである。腹部に弧をえがく衣皺のほぼ中ほどに、僅かに鋭く分かれる衣文の枝ともいふべき部分の表現である。卵形のふくらみのある顔つき、女性的な優しさを窺わせる眉目、盛上彩色の装飾の相近い表現に加えてのその衣文形式は、この一群の京都仏師の造型意識の連繫を示すもののように思われる。

三条仏師憲円造の地藏菩薩坐像の作ゆきは慶派の像のもつ衣文線と同様の写實的な力強さや、体軀のまとめ方の共通性など、慶派の影響を否むことが出来ないことは、従来説かれている通りである。貞治四年（一

三六五)のこの時期における、院派や円派の流れをくむ京都仏師の作風と、奈良から興って京都にも進出し、主流を占めた慶派の作風とはかなり弁別し難いものとなつてはいる。しかしこの憲円の像においても、端麗な表情に京の三条仏所の流れをとどめていると考えられる。この時期の慶派の諸像の例を見ると、もう少し、相貌に強さや、実人を想定させる写实的傾向や、男性的な線の太さなどを見出すのである。

京都に仏所をもち、必要に応じては地方に赴いて仕事を続けていたと思われる院派、円派などの系統は、近年院派と思われる多くの在銘作例が新たに紹介され、その作風の輪廓も徐々に明確にされようとしている。しかし円派の作例に関しては必ずしも多くは見出されない。名前に円の字があつても必ずしも円派の作家であるとは限らない場合もある。いままたここにあげる作家には円の字がついており、作風が京都仏師と考えることが出来、共通する点が見出される作例を加えておく。

#### 四 豪円作薬師如来立像

東京個人蔵薬師如来立像は、その光背、台座とも当初のままに伝えられた像であり、台座に墨書銘が見出された。七重蓮華座の敷茄子の下に蓮華座の裏に歌が、その下の最上部の框座裏に年記と仏師名が記されていた。

康永元年八月<sup>日七</sup>始之

少納言法眼豪円

中尊  
卿法眼

歌は

新知見の南北朝時代在銘像

「うつつも夢ともわけぬよの中になさけもしらぬ君そかなしききへやらぬ露のうらめし」

と判読しうる。この薬師如来像は光背共総高一四七センチ、像高六六・五センチ、台座高三二センチ、光背は透彫舟形で、本体とも表面は褐色

挿図18 薬師如来像  
東京 個人蔵

挿図19 同右 側面

挿図20 同右 斜

## 五 堯円作京都廢医王寺阿弥陀如来坐像ほか

三条仏師憲円の像に示されるこの種の衣文のやや先行する時期の像として、京都府綾部市の廢医王寺の阿弥陀如来坐像がある。

(胎内背面墨書)

元亨元年三月 日 法印堯円(花押)

があり、元亨元年(一二三二)の鎌倉末の年紀と、堯円の名が記されているが、この堯円は、「石清水八幡宮記録(当宮縁事抄<sup>註8</sup>)」に記される、暦応二年八月一日に八幡宮小社(十八社)御神体造進用途事を注進している法印堯円と同一人ではないかと想定される。同文書に、「此注進者三条法印、時ニ大仏師也」と記されており、三条仏師であることが明記されている。さらに、園太暦貞和三年(一二四七)十一月二十八日の条に、<sup>註9</sup>仙洞(光嚴上皇御等身の十一面觀音像を仏師堯円に命じて造立、供養が行われたことが記載されており、この堯円の像もまた同一名の作者の事蹟として注目される。

これらの記録の堯円と密接な関係を思わせるこの像は、現在綾部市梅迫町岡の段の小堂に安置されている。前後はぎ、両肩より別材、膝前別木、首柄さしの寄木造玉眼、両手先定印を結ぶ像で、全身黒色を呈しているがもとは彩色像であったと思われる。雲唐草文、荷葉文様の盛上彩色が衣に施され、衣の端に縞文様がある。鳳凰文も見られる。袈裟の形は写實的に、オーソドックスであり結跏した右足ゆびが三本、膝上にわずかにのぞく彫出なども巧みで、眉目端正である。像高七一、髪際六一・五、膝張五七センチ、この袈裟の胸前にかかる衣文の形式は、その分岐が長目ではあるが、前記の諸例と意図を同じくして彫出されていると

台座銘

同上

挿図21

がかった色の、素木風の像である。寄木造で、両肩より別材、耳後で前後矧ぎ、背面の肩、腰の部分に横はぎが認められる。足柄は共木で彫出する。両手先、足先は別木である。螺髪彫出、玉眼、

台座銘

同上

挿図22

幾分伏目でふくらみをもつ瞼、丸味をおびた頬、端麗な顔つきであり、鋭い衣文線を描き出すノミの切れ味とともに、この時代の仏師

としては手法的に洗練された作であることを示している。しかし、体躯の均衡の上で下半身に衰弱が見うけられ、ポリウムがなく寸がつまっております、側面観も薄手で、萎縮した感じを与える。この辺りに鎌倉時代の像との差が窺えよう。

年紀と、作者豪円を記す文字の書体と、恋の歌と思われる歌の文字の筆蹟<sup>註7</sup>とは同筆と考えられ、その書体はやや古様である。

前述した三条仏師憲円の地藏菩薩坐像と同様の衣文の彫出が、腹部をおおうひだの上部と下部の二ヶ所に現わされている。

半にあつて様式的連繫が見出せるこの様な像を作っていることは注目すべきで、しかもこの仏所としての一特色が後の作家に伝承されて行つたと見られるのは興味ふかい。

少し後の三条仏師の作例として、近年紹介された岐阜県加茂郡八百津

挿図26 同右 胎内銘

思われる。この像が三条仏師法印堯円の作つた像であると考えて矛盾するものはないであろう。この時代の作者としては、十四世紀前

挿図25 阿弥陀如来像

京都廃医王寺

宝戒寺 地藏像 観音寺 十一面観音像 櫟野寺 弥勒像 廃医王寺 阿弥陀像

挿図27 諸像腹部衣文部

町の明鏡寺の聖観音坐像がある。貞治七年（一三六八）三月六日、三条宰相法眼曉円の胎内銘<sup>註10</sup>がある。像高五〇センチ、檜の寄木造、玉眼、麻の葉文等の盛上彩色を施した整った顔つきと衣文線をもつ像で、十四世紀後半の三条仏師の正統的作風を示す作例として掲げられる。

## 六

なお、仏師名に円字が付けられている作者の作例をあげると、その一に、米国バワーズ氏蔵の馬頭観音坐像がある。この像は、

（胎内前面墨書）

六観音一作 仏師覚円 年四十八才

（胎内背面墨書）

文和二年<sup>癸巳</sup>三月 日

奉造立六観音内馬頭像 葛貫中山寺

右志趣者為大願主帰道菴主大檀那

平重直并大伴氏女願主二親定心明円

成道正覚乃至法界

有情平等利益也

<sup>註11</sup>の銘があり、文和

二年（一三五三）の

年記と大仏師覚円

個人蔵 薬師像

旧常光寺 二天



明鏡寺	なる作者名が見出される。葛貫中山寺が、西
岐阜	国三十三所観音霊場の
聖観音像	一として著名な中山寺
挿図28	であるか否かは明らか
	ではないが、この馬頭
	観音坐像の作ゆきは、
	正面と左右の三面の顔

の彫出、大きく膝張を出し、安定感のある体躯のバランス等、一九・七センチの小像ではあるが、かなり整った上手の作であって、おそらくは中央作家の手になるものと思われる。この像は未見であるが、胎内銘の資料を得たので掲げた。

この外、和歌山広利寺の十一面観音立像の作者頼円も、円派の仏師として知られている。

以上三條仏師と関係が深いと思われる諸作者を中心として作例をあげたが、年代順に列記すれば、

- |    |         |        |            |
|----|---------|--------|------------|
| 堯円 | 阿弥陀如来坐像 | 廃医王寺   | 元亨元年（一二三二） |
| 性慶 | 普賢菩薩坐像  | 志那神社   | 建武元年（一二三四） |
| 秀弁 | 弥勒菩薩坐像  | 櫟野寺    | 暦応三年（一二四〇） |
| 豪円 | 薬師如来立像  | 東京個人蔵  | 康永元年（一二四二） |
| 性慶 | 釈迦如来坐像  | 願成寺    | 貞和二年（一二四六） |
| 〃  | 如意輪観音坐像 | 実相寺    | 同じ頃か       |
| 覚円 | 馬頭観音坐像  | パワーズ氏蔵 | 文和二年（一二五三） |

頼円等十一面観音立像	広利寺	正平八年（一二五三）
秀弁 十一面観音坐像	観音寺	文和四年（一二五五）
憲円 地藏菩薩坐像	宝戒寺	貞治四年（一二六五）
暁円 聖観音坐像	明鏡寺	貞治七年（一二六八）
三条民部法橋等二天像	旧常光寺	応安六年（一二七三）

挿図29 馬頭観音像  
米国 パワーズ氏蔵

となる。南北朝時代を中心とする十四世紀中葉の、これら京都仏師の伝統を伝えられると思われる諸像の作風、造像の傾向の一端の考察を試みた次第である。

挿図30 同右  
胎内前面銘

本稿は昭和四十四、四十五年度科学研究費（総合研究(A)）による「南北朝を中心とする日本中世美術の形成過程の研究」の一部である。

挿図31 同右  
胎内背面銘

1 註  
奈良国立博物館刊  
「室町時代仏像彫刻」  
（昭和四十五年）

2 西尾市順成寺、実相寺諸像の調査には西尾市史編さん室神谷和正、榊原宏之両氏の御協力を頂いた。

3 誠文堂新光社、「日本美術大系彫刻」(昭和十六年)では、鎌倉時代の慶派の仏師として性慶をあげ、実衡記の記載についてふれている。なお、性慶という仏師名は、江戸時代に東大寺の地藏菩薩を元禄十一年に修理した「大仏師椿井民部性慶」がある。

4 藤原公衡記「管見記」中に収められている「実衡記」正和四年の記載に、「春日社頭和歌諸事」と表題あり、神輿仮屋上棟のこと、一門の南都西下のこと、南都西南院での蹴鞠のこと、等に続いて、行事の一として道々輩交名が記される。

まず「大宮」として、番匠国弘 漆工清光 蒔絵師仏成 銅細工禪覚 打物師同 鋳物師親法 鏡造願正 以下、鍛冶 平文師、玉造、貝摺 錦儀 綾織 両面織 繻師 組師 平緒 大刀造 木道 茜染 紅染 紺掻 大致張 甲造 乱緒造 獅子舞 油車師 轆轤師 打殿 障子張 冠師につづいて木仏師 三条法印 朝円 絵師隆恵 女工所、御細工 等と記される。

「二宮」「聖皇子」「客人」「十禪師」「三宮」も略同様に諸職が人名と共に列記されている。

5 史迹と美術三五〇号 毛利久「秀辨作観音寺十一面観音像」

6 美術研究二四四号拙稿「神将形二天彫像上」

7 歌の解説には田村悦子氏の示教を得た。日本美術工芸三七九号 拙稿「仏工のらくがき」。

8 大日本史料第六編之五 暦応元年十二月十四日〔岩清水八幡記録 当宮縁事抄〕山城 中略

注進 八幡宮小社御神体造進用途事

一住吉社御神体 御居長一尺二寸代式貫五百文 一地主社御神体 同 一伊津岐島社  
同 一大將軍社 同 一今若宮社 同 一南宮社 同 一祖伊大明神社 同 御居長  
一尺 代式貫文 一祇園社 同 一小守社 同 一上津瓦社 同 一竜田社 同 一  
三輪社 同 一菴主社 同 御居長 七寸 代式貫五百文 一稻荷社 同 一貴布禰社  
同 一江毗主社 同 一三郎殿宮 同 一百大夫社 同 己上十八社分參拾陸貫文  
右省略分、注進如件

新知見の南北朝時代在銘像

暦応二年八月一日 法印堯円在判

此注進者、三条法印、時ニ大仏師也、一下略

9 大日本史料第六編之十 貞和三年十一月二十八日条  
10 この像については久野健氏の示教を得た。岐阜県教育委員会「岐阜県文化財図録第一集」(昭和四十五年)によれば

一集「(昭和四十五年)によれば

右正観音之志明鏡前住無肯元全庵立願者也 今玉堂曇球永為後世菩提泰造立□也 貞治七年正月六日 玉堂曇球(花押) 作者 三条宰相法眼曉円(花押)

とある。寺の靈光山明鏡寺記録によれば、鎌倉建長寺第四世が文和二年に開基したという。曉円作の像は三重県にもある。貞治七年に法眼位であるこの曉円は、元亨元年に法印であった廃医王寺の阿弥陀像の作者堯円とは別人と思われる。

11 馬頭観音坐像胎内銘の写真は高橋武二氏の提供されたものである。